

江戸から明治に時代は移り、現代につながる高速交通の先駆けとして青森県にまず到達したものは、陸では鉄道、海では蒸気船であった。鉄道の知識が日本にもたらされたのは江戸時代末期のペリー来航の頃といわれているが、それから幕末までに作られた多くの鉄道

72)のことであった。しかしその後も、政府の財政貧窮や技術的な困難から鉄道建設は思うように進まず、現在の東海道線が東京から神戸まで全線開業したのは明治22年(1889)のことであった。

85)に最初の路線である大宮と宇都宮の間を開業させ、そのわずか6年後の明治24年(1891)9月1日には、現在の東北線にあたる上野から青森までの全線を開業させたのである。開業日の様子を伝える東奥日報によると、現在の駅よりやや海に使い安方町に作られた青森駅の広い構内は、一番列車を出迎える人々で立錐の余地もないほどで

現在と比べると「鉄道一昼夜」とはいかにも悠長な感を受けると、それ以前を思えば比較することすら出来ないほどのスピードアップであり、基本的に自らの足しか頼るものなかつた旅人たちにとっても、不安定で時間のかかる海運に頼らざるを得なかつた貨物の運送にとつても、鉄道の開業は革命的なものであったのである。

陸上交通の革命

石塚雄士

(県民生活文化課県史編さんグループ)

年のことであつた。その内容は、華族・士族の授産と国家富強の一挙兩得を狙つて、華族・士族有志による鉄道会社の設立とそれによる鉄道建設の認可を求めるものであり、この構想はその後の政府との交渉を経て、明治14年(1881)に日本鉄道会社の設立として結

このように鉄道はまさしく文明開化のシンボルとして、東海道線の全線開通から遅れることわずか2年で青森まで到達し、この後日本中にとんどん広がっていった鉄道網を通じて全国と青森との距離をはるかに縮め、人と物の往來を飛躍的に便利で安全なものに変えていった。そして、開業のその日から今日に至るまで、毎日多くの人々と物資を運び、人々の暮らしを支える大動脈として機能し続けているのである。



開業当時の青森駅(安方駅)

『目で見る青森の歴史』(昭和44年・青森市)より転載

立4年後の明治18年(18

この日本鉄道会社は、設立4年後の明治18年(18

新幹線と在来線を乗り継いで4時間余しかかからない